

## 総合討論

**岩鼻**：すべての報告が終わりましたので、これから総合討論に入りますが、まず報告時の質疑応答に対する補足があれば、お願いいたします。

**藤田裕嗣(神戸大)**：良洞マウルにおける郷校に関する矛盾など、日本の植民地支配下における状況は世界文化遺産に登録された今、どのように説明され、評価されているのか？

**山元**：日本統治時代のことは世界文化遺産に関しては完全に無視されている。世界文化遺産に登録される以前は、風水言説に結びつく問題でもあるのだが、現地ガイドが植民地時代に日本人が入ってきて、この村を如何に破壊しようとしたのかを面白おかしく言及することもあったが、世界遺産に登録された瞬間に、いっさい日本統治時代についての説明は消滅し、李氏朝鮮時代のものが如何に残っているのかということに限定するようなガイドしか行われなくなった。日本統治時代に、我々民族は如何に立ち向かったかという、一般的に韓国の観光地でみられる言説は影を潜めた。

**深見聡(長崎大)**：実家が集成館事業のすぐ近くののだが、観光の波及効果となると、数字で効果を測る面が強く、そうなると世界遺産の登録が質の変化を生む契機になりはしないのか？一般の理解する真正性に着目する登録の機会を生むのではないかと？もうひとつは景観のまちづくりのとらえ方だが、鹿児島市は城下町の歴史がありながら、80年間で3回の戦災を受け、歴史的景観が失われている。その中で観光まちづくりを進めていく場合に、どの程度、真正性にのっとった景観の修景が必要か？

**島津**：集成館事業は既存の建物がなく、それを復元するとイミテーションになってしまう。煙突を復元することだけではなく、西洋技術が、ひとつやふたつではなく、製鉄・造船・紡績といった多面的な技術分野を導入しており、そういった技術がどのようなメカニズムを持っているのかを、我々は最後の検証面でしか知らないで、しくみの段階から来訪客に、しっかり示すことのできるような事実を提示することが大切だと思っている。昔の歴史遺産をそのまま復元することはできないので、実際に集成館事業で先人たちが心血を注いできた技術がどのようなものであったのかを示すことが大切だと思っている。景観については、ひとつ鶴丸城のご楼門の復元をしようという動きがある。城の門だけを造ればよいというわけではなく、街の回遊性を高める建築的なシンボルになればよいと思う。周りには博物館施設が並んでいるので、そちらの方々とも同じ会議を持って、どのように時間消費を拡大できればよいだろうかという取り組みを行っている。景観には直接に触れることはできないが、そのあたりの調整は行っている。

**平山**：最近、九州の観光に関心を持つようになったが、九州観光はリゾート面では北海道や沖縄、海外にはかなわないが、歴史や文化面では通なお客さんが多く来ることを知った。駅は観光客が街の第一印象を受ける玄関口としての役割を持っているが、近年の九州の駅は、長崎県の早岐駅の歴史的で重厚な駅舎の解体が決まったし、私の出身地の長崎駅もまた異国情緒のただよう駅ではなく、観光の玄関口が歴史文化を加味したようなデザイ

ンで造られていない。レトロな門司港駅は例外だが、鹿児島駅も建替える時に単純にエレベーターがきれいなだけの駅になりかねない。世界遺産の結節点としての鹿児島駅の意味は、どのようなところにあるのか？

**島津：**JRに対しては、不易と流行は両立されるべきであるとお話している。流行を追い求めるのは新幹線駅である鹿児島中央駅で、新しいきれいな駅ビルが建てられている。鹿児島市の観光施策でも歴史と文化の町鹿児島とうたっており、時代が変わっても変わらない価値を提供するのが鹿児島駅の役割であると先ほど写真も使って説明した。

**藤田：**世界文化遺産の構成要素は多くあるが、この中のストーリーが、どのようになっているのが重要と思われる。配布資料に掲載されている絵図は佐賀県武雄の鍋島藩の史料であると思われ、この絵図はかなりの機密事項と思われるが、薩摩藩と連絡をとりあっているとすれば、ストーリーができるのではないのか？

**島津：**薩摩藩の近代化の趣旨は薩摩藩だけが近代化してはしようがないというもので、勝海舟も坂本龍馬も来ており、オープンソースとして行ってきたので、ストーリーは組み立てやすく、理解してもらえると考えている。

**内田忠賢(奈良女子大)：**寺社と社寺の使い分けは、どのような視点からのものであるのか？また、近代ナショナリズムと寺との関わりは、いかなるものであったのか？

**平山：**近世は寺社奉行で、寺院が上に来るのだが、近代以降は神道国教化政策で、明治の最初から、社寺となり神社が上になる。ところが、東京の庶民は寺院と神社をほとんど区別せず、しかも川崎大師、成田山、西新井大師といったように、郊外の鉄道沿線で人気を集めたのは、ほとんどが寺であった。大正9年に明治神宮が創建されると大きな変化が起こってくる。それまでは国家的に人気のある神社はなかったのだが、明治天皇というカリ

スマが亡くなり、神社という存在が帝都東京において大きな意味を持つようになった。それ以降は東京でも社寺ととらえてよいのではないか。住吉大社がある大阪や熱田神宮がある名古屋などは基本的に社寺と理解してよいのではないか。地域によって、また時代によって変化する側面がみられる。

また、寺も国家的な価値を押し出して、ナショナリズムを目指すのだが、皇室と神社を結びつける国家神道的な言説が昭和に入って多く出てくると、その言説の中では寺が捨象され、神社のみで語られるようになる。

**岩鼻：**満洲のツーリストは西日本が中心であるとのことであったが、満洲移民は1位が長野県、2位が山形県と東日本が主体となっている。ツーリストと移民の創出先が大きく異なることの背景には何があるのか？

**荒山：**朝鮮・満洲への旅行者が西日本に多かった理由は当時の海上航路の問題といえる。海外移民は、東日本は日本郵船が横浜に拠点を置き、西日本は大阪商船が大阪と神戸に拠点を置き、両者が競合しないように政府が命令船というかたちで調整して、住み分けができていた。満洲航路は主として大阪商船が独占していた。ヨーロッパや北米・オセアニアは主として日本郵船の独占航路だった。大阪商船は当初、瀬戸内海の航路で会社を立ち上げ、別府温泉の開発を手がけている。別府は関西から陸路では不便だが、船では高松などを経由して別府まで1本で行ける。多くの宣伝を大阪商船が別府でつくっている。満洲は、その延長線上に位置づけられる。大阪を出て関門海峡を抜けて朝鮮半島へ行く船も大阪商船が最初は運航していた。後に朝鮮郵船や鉄道省の船に変わるが、その延長に大連があり、大阪・神戸から船ひとつで行け、鉄道から船に乗り換える必要のある東京よりはアクセシビリティが高かったのも、より身近なものとして宣伝されていた。台湾も同様だった。移民も同じ船に乗っていたが、移民

として定住するのと、修学旅行として長くても1ヶ月間ほど旅行するのでは意味が違ったと思われる。

**平山**：戦時体制下でも、娯楽はけしからんとみられても、教育のためであれば正当化でき、伊勢神宮は国民にとって重要なところだということで、教育の名目であれば旅行が正当化される。東日本大震災直後の修学旅行でもみられたことである。近世の道中日記で通過儀礼的性格を持つのは明治のいつ頃まで続くのか？公教育が代替していくところがあり、関西では伊勢講が無くなった理由として修学旅行で行くようになったということがある。

**西海**：明治20年代の道中日記を見ていると、特に明治20～22年の日記には、途中で少し鉄道に乗り、なんとか「ステーション」に行って降りて、というようなカタカナ表記の記述がみられたりする。東海道本線全通の影響か、中に時刻表の書き込みがみられる例もある。ある一定の区間だけを鉄道に乗るという事例もみられる。記録的には明治20～22年が変わっていく時期といえる。

**平山**：明治に入ってからすぐに近代化するわけではなく、近代史では明治20年頃がいろいろなシステムの転換期とみられ、政治体制では明治維新が転換期だが、大日本帝国憲法もあり、社会史的には明治20年頃が転換期であると通説的に言われており、それとフィットする。

**原**：霊山参詣の場合でも、明治20年から30年くらいに長野県で学校登山が始まり、富士山も1900年ころから始まり、学校登山が講の登拝に置き換えられていく。山形県の飯豊山は日本百名山のひとつであるが、民俗の世界では、とりわけ通過儀礼で有名で、戦前から戦後しばらくまで15歳になると初めて登り、危険なところで滑落すると一人前になれなかったという。

**岩鼻**：道中日記そのものが明治30年代頃が最

後で、教育の問題や時刻表が印刷されたりして、道中日記が不要になる時期があるのではないかと？

**西海**：道中日記が消えていく時期から7、8年ほど遅れるが、絵葉書へ移行する。今、3代前の2000枚ほど絵葉書を持っているが、明治から昭和7年まで残っている。明治37、38年頃から残っており、4月から管理している、とある博物館に残っている絵葉書でも同様のことが言える。

**平山**：絵葉書は家族などに消息を知らせ、自宅に戻ってきて、もう一回記録として見ることができるというメリットがあるのか？

**西海**：絵葉書を家族に出して、戻ってきて、それを旅行ごとに整理してあった。

**荒山**：管見の限りでは道中記の最後のものは明治20年代だった。おそらく明治30年代に消滅している。道中記の系譜を調べたことがあるが、当初は近世の街道の里程が記されており、街道を旅行する案内書であったが、明治10年代の道中記に鉄道が併記され、街道と鉄道が並行して走る道中記が登場し、東海道本線と東海道が並行して描かれているものがある。両者が並行する時代が明治10年代にはあった。鉄道旅行案内書が登場するのは明治20年代であると思われ、この時期に街道から鉄道へという転換が存在する。

**小口千明(筑波大)**：鉄道が大きな役割を果たすという意味で、一見ちがうテーマでも共通の文脈になるかもしれないということでの質問です。かつて環境認知という観点で日本における海水浴の導入や普及を調べたが、明治10年代に導入され、当初は病気治療のための長期逗留型で、鉄道が普及することによって、日帰りで頻繁に行ったりきたりするというタイプの海水浴に変わっていく。明治10年代後半から20年代はまだ療養型だが、明治30年代後半から40年代になると、行楽型がかなり普及してくる。寺社参詣や初詣の観点からみると、ナショナリズムのあとづけだという

主張であるが、内田のコメントにあった遊園地や海水浴の問題とも通底するし、鉄道が往復切符などの割引で明治後期に増客の実績があり、それを大正期に初詣や遊園地へ導入したり、商業施設や住宅地開発など、別の文脈で研究されてきたことと、あわせて体系化される可能性もあるのか？

**平山**：説明不足であったが、明治20年頃に東京で初詣が成立する。海水浴よりも社寺参詣のほうが鉄道の行楽として先行し、明治5年の日本最初の鉄道開業後すぐに川崎大師、池上本門寺への運賃割引や臨時列車などを社寺参詣に関して行う。鉄道が行楽やレジャーで真っ先に注目したのはまず社寺参詣で、その後遊園地や海水浴に拡がっていく。大正以降は戦前のブームを迎える。近世から近代の移行期を考える時、鉄道は新しいものをつくる側面を持っていたのみならず、近世から伝統を活用し、改変していったと考えられる。

**小口**：四国遍路の接待について、近年のマスコミはオリンピック招致などに絡んで「おもてなし」という言葉をキャッチフレーズに使う時に、四国遍路でも「接待」というべきところを「おもてなし」が使われ、確かに重なるところがあるかもしれないが、「接待」の本質を誤解させるのではなからうか？

**浅川**：端的に言えば、巡礼者の歓待習俗である接待は、昭和30年頃までの四国での生活経験のあるなしによって大きく変わっている。昭和30年頃を境に「へんど（いわゆる乞食遍路）」がいったん断絶する。「お遍路さん」と「へんど」の間には光と闇が存在する。その後、明石海峡大橋の開通やツーリズム、過疎化の急激な進展の中で、四国遍路が文化資源として見直され、世界遺産登録運動の中で接待が再構成された。民俗としての接待が有していた「ほどこし」の面が現代的文脈とそぐわないことから消え、四国遍路は暖かく巡礼者を迎えてきたことを前面に出すかたちで、接待を再構成した。接待を、より観光に近づ

けるためのある種の脱構築化が「おもてなし」であり、2006年頃に「四国遍路おもてなしネットワーク」というNPO団体がつくられ、「おもてなし」が前面に出された。その後東京オリンピック招致でも使われたことから、四国遍路の「接待」の歴史性や民俗を塗りこめていくことが危惧される。

**西海**：1970年から遍路とのつきあいがあるが、接待が変わりつつある。正直に言うと、私は山で祈祷の受付をする役割であるのだが、そこに来るのは、仏のみを求めてくる遍路と、神仏をいっしょにする遍路の、ふたつのパターンに分けられる。これは文書ではわからないのだが、入ってきてまず大祓いをして拍手を打って、その後すぐ般若心経を唱えて受付に来る遍路と、大祓いだけで来る遍路とに分かれる。先ほどの明治20年から変わってくるという話題にも関わるが、140年過ぎた今でも神と仏を分けない遍路のほうが多い。実を言うと私は乞食遍路をしているが、善根宿に無料で泊まり、特に徳島から高知の山間部で、お世話になったことがあって、それは昭和40年代からなので、先ほどのもう10年早い事例からみると、だいぶ接待の仕方が変わってきた、というか手慣れてきて、その後、50年代から平成になると、おもてなし・接待の仕方が異なってきたところがある。社寺参詣の話題で言えば、恩師の新城常三『社寺参詣』の改訂版のお手伝いをした際に、寺社奉行というが、気にしないとされ、資料集めも手伝ったのだが、経済史の立場から社寺参詣にしたいと強調されたことが記憶に残っている。

**深見**：第3セッションのパネリストの方々へお聞きしたいのだが、歴史地理学や歴史学の成果を観光に生かしていく時には、必ず観光の4つの構成要素で、地域コミュニティがあり、地域コミュニティの方々が歴史的、歴史地理的価値を認識していくためには、専門家がどういった工夫をして、それを地域の方々

に噛み砕いていくのか、具体的な考えがあれば、お教えいただきたい。

**山元**：住民も歴史の重層性を意外に知らない。「輝ける時代」のみならず、すべての地域に先史時代からの重層性があるはずで、それ以外の時代を象徴するもの、また、それが示す空間といったものをきちんと示すことで地域が成り立っていることを啓蒙すべきである。私のフィールドでは、ちゃんと歴史学者がからんでいるのかわからないが、明らかに近代にできた学校について軽視していて、最近の歴史地図では古くからあったように描かれている。こういったものについて、ちゃんと考え、いろいろなかたちで住民とコミットする際にも、住民の気づいていない重層性がある。住民が持っているさまざまな問題があり、たとえば「教会」は同族集落の儒教社会の中で夫に先立たれた女性を守る役割を果たしてきたのだが、住民は、それをほとんど知らない。それを伝える役割がある。鹿児島の場合も、集成館に意義があるのは理解できるが、鹿児島駅もまた、ターミナルの結節点としての役割だけでなく、たとえば、門司港は門司駅ができたことによって、ターミナルとしての役割を失うが、そのおかげで景観を維持することができたわけで、そういったことを歴史的に説明した上で、鹿児島駅も近代化遺産としての意味がある。

**島津**：最初の質問から答えると、現状では、我々の場合はシリアルノミネーションを行っているので、鹿児島のことだけをわかっているだけで、それで済むわけではない。その意味で、昨年度から鹿児島市内・県内のNPOや博物館、県と市に加え、我々民間も入って、体系だった勉強から始めているところだ。特に近代化遺産の場合は技術者の移転によって左右されるので、そのあたりの前後関係ははずさずに勉強しているが、俺たちが先だ、というようなお国自慢が始まったりするので、そのあたりがシリアルノミネーションのむず

かしさを痛感している。鹿児島駅の操車場の北側に港があるが、そこが中世の鹿児島の重要な港湾で、薩摩と大隅を結び、ザビエルもその港を目指してきて、上陸地点がある。鹿児島駅そのものよりも、取り囲む地域資源を含めて、その一帯が鹿児島の一種の中心であるという表現のほうが理解を受けやすい。

**鷺崎**：中等教育での地元の歴史の見直しと位置づけが必要。九州大学は九州各県から進学者があるが、たとえば鹿児島県出身者に尚古集成館のことを聞くと、何ですか？という答えが返ってくることもある。鹿児島の歴史を十分に認識していなかったり、所与のものとして当たり前だと思って過ぎてしまう。その意味で、地元を誇るのはよいことだが、それがどういう価値を持つのかと言うインバウンドの面と、もうひとつは自分たちの持っている価値が全体的に、どのように位置づけられるのかを、中等教育でしっかり行うことが大事だ。今の旅行形態は、FIT (Foreign Independent Travel 個人手配旅行) やSIT (Special Interest Tour) というパターンが隆盛的で、修学旅行でもFITやSITの要素を入れながらも、いまだにやや半強制的、かつ団体的に動いているというふたつの要素を持ち、そういった機会こそが重要で、半強制力をともなうところで、どうやって位置づけられていくかを見直すことが大事で、それは鹿児島の事例だけではないと考えている。

**松井**：長崎は文化の発見や発信事業には積極的だが、長崎巡礼でも、オーセンティックな正しい巡礼をいかにガイドするかに留意している。そこでは、ふたつの問題があり、ひとつはガイドの担い手をいかに養成するか、ということで、現在約20名がいて、半数は五島だが、巡礼のコンテンツとして何を歴史・文化として切り取って、そこで何を語らせるのか、テキスト化という作業において、歴史を如何に読み解くかが課題として残る。キリシタンという言葉には歴史的文脈の中でネガ

ティブな意味づけ、それは社会的な差別や教育、進学、就職とか、長崎のローカルな文脈の中で、いろいろな意味がある。その中で何を切り取るか、先ほどの遍路ではないが、それがうるわしいかたちで我々は一緒にやってきたと語られることには、少し注意深くみていく必要があると考える。

岩鼻：終了時間となりましたが、最後にオーガナイザーの原淳一郎から、とりまとめをお願いしたいと思います。

原：旅のおふたりの報告は、より古い事例ではあるが現在でもなんとか残っていて、しかし様相が昔からするとなかなり変わってきている。どんどん新しい価値が出てきているので、それとどうやって折り合いをつけていくのか、という保存という観点で、まとめられる。

歴史遺産のお三方の報告は地域活性化の事例で、その活動が収斂していく過程で排除されていくもの、変わっていくもの、見落とされていくものがある。しかし人間は生きていかなければならない。これらが活用という観点で、まとめられる。

観光のおふたりの報告は、くしくも国家神道と植民地の事例は戦後に失われたもので、おそらくもう少しすれば体験者がいなくなると。それをどうやって記憶に残していくのか、教育的意義を考える必要がある。歴史学者として、文書の保存だけでなく、活用、教育的意義ということを常々、考えているので、3つのセッションで、すべての視角が提示されたことは大変有意義であったと考える。